

## フィリピン、マヨン火山の近状

＜及川 輝樹<sup>1)</sup>・森 健彦<sup>1)</sup>・高田 亮<sup>2)</sup>＞

「第4回火山災害軽減のための会議及び巡検」において、フィリピン屈指の活火山、マヨン火山を訪れる機会を得た。この火山は、2006年7～10月に長大な玄武岩質安山岩溶岩流を流す噴火を行ない、その後の11月には超大型台風来襲のため、山体に堆積していた火砕流堆積物を起源とする大規模ラハールが発生し、1,000名以上の死者・行方不明者が出た。それらの産状などを紹介する。



マニラーレガスビ間の定期航空便から望むマヨン火山。

山体南西側を望む。山頂からは有史の溶岩流が多数流れ出ている。右側に流れひときわ新しい溶岩流は2006年の溶岩流。山体に刻まれた真新しいガリーは2006年11月のラハールにより刻まれたもの。

1) 産総研 地質情報研究部門

2) 産総研 地質調査情報センター：現 地質情報研究部門



レガスピ飛行場からマヨン火山。  
南から望む。手前の丘は、PGIVOLCSのマヨン火山観測所の建つ丘。  
山頂火口からは、現在も700から1,200ton/dayの二酸化硫黄が放出されている。



マニラーレガスピ定期航空便からのイリガ火山。  
イリガ火山(中央左の山)は、マヨン火山の北にあたる活火山。  
1648年に山頂部が崩壊し岩崩れなだれが発生した。奥の湖は  
その堰き止湖。



2006年溶岩の先端部(南麓 Mabinit Channel) (右と下)。  
2006年の溶岩は、爆発的な噴火を伴わずに火口から静かに  
溶岩流を流す噴火であったが、溶岩流の上面は溶結した火  
砕岩に覆われている(右)。







2000年火砕流堆積物(南麓 Mabinit Channel).  
表面にしわのよったキャベツのような形態の本質礫が多く含まれている。



2006年ラハール堆積物(南西麓 Masarawag Channel).  
デブリフロウ(debris flow)堆積物とハイパーコンセントレイティッドフロウ(hyperconcentrated flow)堆積物が重なる。



2006年ラハール堆積物(南東麓 Buyuan Fan) (上, 右).  
細粒の河川堆積物の上に2006年のラハール堆積物が重なる(上). この地域はラハールの堆積域であるが, 後続のラハールによる侵食によってガリーが刻まれている.  
水位の上昇跡を残す樹木(右). ラハール堆積物の上面から高さ1.5mほど上流側の樹皮が剥げている(矢印部分).

